調査研究報告書

地域社会におけるマナー意識とマナー行動の研究

研究代表者　牧　野　カツコ（お茶の水女子大学人間文化研究科）
共同研究者　加　藤　恭　子（上智大学コミュニティカレッジ）
湯　沢　雍　彦（郡山女子大学家政学部）
松　方　　健（元地域社会研究所）

1998

財団法人　地域社会研究所

はじめに
ー日本人のマナーの低下をめぐってー

公共の場のマナー

「マナー(manner)」という英語は、どの英和辞典を引いても、「行儀・作法ないしは様子・態度のこと」とあって、その意味は、一定しているが、家庭や勤務先から離れた「公共の場でのマナー」となると、簡単な定義は存在しない。

まず、場面が拡大され、さまざまな年令や職業の人間が入り交じり、生活条件が異なり、時間や季節で判断も揺れ動くから、話はとても複雑になる。その上、国や人種や地域の差があり、時代による変化も加わって、ますます分り難いものになってきた。社会学的には、階層の違いを誇示するため階層ごとに異なるマナーもあるという。要するに、正解出しがたい問題の1つなのである。

戦時中は、神社の前を通過するとき、乗り物に乗っていても、いっせいに頭を下げるのが日本人としての公共マナーだった。が今は誰もそんなことをしない。20 年以上前には、会議中でも歩行中でも、モウモウたるたばこの煙に耐えるのが当然のあり方だったが、現在では喫煙者の方が片隅に追いやられている。

公共のマナーはこのように変わっていくものだが、全体としては、日本人の公共マナーは低下していると嘆く声の方が強くなってきた。

たとえば、ある日の朝日新聞「天声人語」欄に次のような記事がのっている。一部を引用してみよう。

「…車内で化粧する女性は珍しくはない。若い層に多いような気がする。なかには、ひざの化粧バックを開けて、1 から本格的に取り組む人もいる。他人の目など、まったく気にしていない。下校時の電車で、身をくねらせて、制服の上着を脱ぎ替える女子高校生を見た同僚もいる。昔は駅のトイレがこの種の更衣室だったものだが、と彼の妙な嘆息。…座った彼もしくは彼女の前に、かりに疲れた老人が立っても、彼らの目には映らない。だから、席も譲らない。…この間まで、日本には以下のことばが存在したように思う。<人目がうるさい。人目を忍ぶ。人目を避ける。人目をはばかる。人目を盗む…>そして、人目を引いたり、人目に立ったり、人目に付いたりすることは、人目がうるさいから、と戒める風があった。人目ばかりを気にしなければならない社会は、むろん息苦しい。といって、人目に余る振る舞いが横行する世の中も、もう少し何とかしたいと思う」(97 年 6 月 6 日)

作家の吉川英明氏は、ある小説の中で、

「私がもし(マイク)タイソンみたいな見掛けだったら、電車の中で股を広げ

て寝そべるような格好で座っている若者の足を思い切り蹴飛ばしてやり、チャカチャカと傍迷惑なイヤフォンは、物も言わずに耳からひっこ抜く。寿司屋で帽子をかぶったまま飲み食いしている奴の帽子をむしり取って踏みにじり、道端でだらしない格好でしゃがみこんでたむろしている餓鬼どもの襟髪をつかんで引っ立てる。男のピアスはペンチを使って捻じり上げ、煙草を吸いながら歩いている小娘を見かけたら、脅して煙草を取り上げる。…ああ、そうしたらどのくらい胸がすっとすることだろうと、心地よい妄想は止まるところを知らない…」(「いわめの歯ぎしり」『本』98年3月号)

とかたって、鬱憤を晴らしている。

たしかに、中学生の「善悪のけじめ感」についての調査結果をみても、80年代に比べて90年代はかなり低下してきたという報告がある。

ベネッセ教育研究所の「中学生は変わったのか」(モノグラフ『中学生の世界』vol.51)の1983年と95年の比較調査によると、取り上げた15項目(常識的にはしてはいけないこと)すべてにわたって、「とても悪い」「かなり悪い」と思う者(悪いという自覚がある者)の割合が低下している。しかも、学年が上がるにつれてそうである。

たとえば、「放置してある他人の自転車に乗る」は87%から77%へ、「他人の体育館ばきを無断で使用する」は76%から54%へと低下し、盗み感覚もにぶくなってきている。「かるくパーマをかける」64%→48%、「うすいマニキュアをぬる」42%→27%、「きまりより太いズボンで登校する」49%→33%など、校則違反に該当しそうな項目も3割以上も低下している。

善悪のけじめが甘くなったともいえるし、悪いことに対する感覚がかなり麻痺してきたともいえる。これらのことは、中学生だけのことではなく、高校生にも、それ以上の年輩の者にも起こっている傾向ではなかろうか。